

幼児用書籍に関する一考察

著者	小杉 直美
雑誌名	北翔大学教育文化学部研究紀要 = Bulletin of Hokusyo University School of Education and Culture Department
号	6
ページ	33-40
発行年	2021
URL	http://doi.org/10.24794/00003328

幼児用書籍に関する一考察

A study of Books for children

小 杉 直 美

KOSUGI Naomi

1 はじめに

筆者は従前より小学校教諭1種免許状ならびに幼稚園教諭1種免許状の取得を目的とした教科「国語」にかかる概論科目を教育系学科の初年次生を履修対象者として担当している。小学校と幼稚園における教育の連携や比較などを踏まえて、小学校学習指導要領ならびに幼稚園教育要領に基づき、教育者・保育者に求められる基礎的言語能力育成を目標に「言葉」に視点をおいて科目を展開してきた。このたび法改正に伴い、幼稚園教諭1種免許状、保育士資格取得に特化して、小学校教員養成と区別した教育課程を展開することとし、幼稚園教育要領、領域「言葉」にかかる教科目を担当する。そこで、改めて領域「言葉」にかかる法的変遷、改訂による現状を整理し、幼児教育において言葉の育成に大きな役割を果たす幼児用書籍について考察をすることとした。さらには当該科目を通して学ぶべき事項、保育者として身につけるべきスキルや能力を考察し、教育課程の展開へ発展させることを目的としている。

2 幼児教育にかかる背景

平成27年より子ども・子育て支援法が施行された。保育の充実、保護者の子育てに関する家庭支援を充実させることを目指す制度である。現在、子育てに対する不安は高まり、児童虐待に関する相談件数の増加が問題視され、待機児童問題も課題とされている。この他、子育てや保育にかかる多くの課題が解決されないままであり、子どもや子育て支援にかかる課題は継続的にその改善を求められている。

平成28年12月に、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（以下中央教育審議会答申（平成28年12月））が出され、学習指導要領等改訂の方向性が示された。平成29年3月には幼稚園及び小・中学校の新学習指導要領が公示された。幼稚園においては、平成30年度から全面実施されている。およそ令和12年頃までの学びを支える改訂である。

また、同時に保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が改訂され、平成30年度より実施されている。同時期における法の制定、要領等の改訂であることから、子育てや保育にきめ細やかさが強く求められてきた状況が理解できる。子どもや保護者を取り巻く環境

の急激な変化の要因は多様である。そのため、保育のより高い専門性と質を維持担保するために施策による対応が継続されていることが理解できる。

改訂を機に3歳児以上の幼児に対する保育・教育する内容は「幼児教育」とまとめられた。各領域において「ねらい」「内容」「内容の取扱い」と項目表記を共通化されたこと、加えて「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」いわゆる「10の姿」が示されたことから、小学校課程との連続性を見据えた共通化を図る目的があり、幼小連携の円滑さが強く意識されていることが確認できる。

このような背景のもと、領域「言葉」への理解を中心に、幼児教育において育成する「言葉」の力に着目した。子どもの言葉を育てる教材としての絵本や物語等の幼児用書籍を通して育成される「言葉」について考察した。さらには「言葉」の育成を担う将来の保育者が備えるべき言葉の力について教育課程を通した育成という視点で考察をすすめた。

3 幼児教育にかかる改訂

幼稚園教育要領は、「全国的に一定の教育水準を確保するとともに、実質的な教育の機会均等を保障するため、国が学校教育法に基づいている大綱的基準」であり、改訂のサイクルはおおよそ10年ごとである。

平成29年改訂の要領前文、第1章第2に幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」として、幼児期の終わりまでに育みたい資質・能力が明確化された。5歳児修了時までには育って欲しい姿が明確化されたことから、三つの柱を観点として、小学校課程と共有することにより幼小接続を推進することが明らかになったことも改訂のポイントである。

幼稚園教育は環境を通した教育であるが、明確化された「幼稚園教育において育みたい資質・能力」は、幼児期の特性を踏まえて三つの柱が整理された。

「これからの変化の激しい社会を生きるために必要な力である「生きる力」や、その中でこれまでも重視されてきた知・徳・体の育成ということの意義を、加速度的に変化する社会の文脈の中で改めて捉え直」（中央教育審議会答申（平成28年12月））されたとき、「生きる力」の育成に必要な資質・能力は、遊びを通しての総合的な指導を軸に一体的に「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱として育んでいくことが肝要とされた。加えて、現行の幼稚園教育要領5領域の枠組みにおいて、育むこととされた。

また、「言葉」の力を考察する上では、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」を育成するための考慮すべき10の指導上の考慮に「言葉による伝え合い」「数量・図形、文字等への関心・感覚」が記されたことも注目すべきである。指導計画の作成上の留意事項については、「言語活動の充実」との明記がある。「幼児期における言語活動の重要性を踏まえ、幼児が言葉の

リズムや響きを楽しんだり、知っている言葉を様々な使いながら、未知の言葉に出合ったりする中で、言葉の獲得の楽しさを感じたり、友達や教員と言葉でやり取りしながら自分の考えをまとめたりするようにすることが大切」と記載されている。

「教科書のような主たる教材を用いず環境を通して行う教育」を基本とするのが幼稚園教育であるため、言語活動の充実を図り、言葉の力を育てる上で、絵本や物語など幼児用書籍の果たす役割は大きい。小学校教育課程における言語活動とは形を異にする。

領域「言葉」において充実した内容としては、第2章 ねらい及び内容に「1ねらい(3)日常生活に必要な言葉がわかるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。」とある。3 内容の取扱いには「(4)幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。」とある。言葉に対する感覚をその響きやリズム、表現などに親しみ楽しむことによって言葉を豊かにすることを充実させるように明記された。

先述のとおり、5歳児修了時までには育って欲しい姿には、豊かな言葉への感性、言葉の力が既に明確に求められている。幼小の連携を考える時、幼児教育における育成の基礎作りは小学校においての教育に傾倒しがちであるが、決して小学校への準備教育ではない。あくまでも環境を通した教育が主である幼児教育における育成は小学校教育とその形を同一にしないことは留意すべきである。

4 「言葉」の力

領域「言葉」において「言葉」の力の育成について充実された改訂内容であるが、改めて、「言葉」の力のとらえ方は様々な角度があると考え。「絵本や物語などに親しみ、言葉遊びなど」を通して「言葉が豊か」になるように育成する。とあるのは、言葉への感覚、感性を育てる大切な時期として幼児期、5歳児までをとらえているからである。この時期を基礎として、個々の言葉への感覚、感性が育ち、その後の言葉への関心や学びへ影響をしていくと考えられる。「言葉の力」について、いくつかの定義がある。

はじめに教育課程において求められる資質・能力の枠組みとして、国立教育政策研究所の21世紀型能力（2013）の定義がある。思考力を中核としてすえて、支える基礎力（言語スキル、数量スキル、情報スキル）、活用を方向付ける実践力の三層構造からなり、重層的にとらえられている。積み上げではなく相互作用的に開発されている。思考力は問題解決・発見力・創造力、論理的・批判的思考力、メタ認知・適応的学習力とされている。実践力は、自律的活動力、人間関係形成力、社会参画力、持続可能な未来づくりへの責任とされている。例えば、いかなる学校種の授業においても三つの資質・能力は意識されるべきであり、「知識」とは別次元のものである。言語スキルが基礎力に内包されており、基礎力をなす要素としてとらえている。

実践力がすなわち21世紀型能力であり、生きる力につながるとしている。

中央教育審議会の教育課程企画特別部会では、育成すべき資質・能力の要素として、個別の知識・技能である知識（何を知っているか、何ができるか）、思考力・判断力・表現力等のスキル（知っていること、できることをどう使うか）、主体性・多様性・協働性、学びに向かう力、人間性等の人間性（どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか）の三要素が整理された。各学校種の各教科で、育成する資質・能力の関係は、いわゆる総合的学びの時間において育成される「言語能力」「情報活用能力」が基盤となり、三つの資質・能力を支えていく、いわゆる人間中心型教育課程に変容した。「言語能力」は基盤ととらえている。

このように「言葉」の力の定義は複数あるが、いずれも言葉は基盤であり、基礎力をなす重要な要素ととらえられている。その育成が肝要であり、教育課程の基盤を支える重要な力ととらえられていることがわかる。言葉の能力は、学びにおいて基礎となる力であり、小学校以降においては教科「国語」のみならず他の教科等で、作文、レポートの作成をはじめ、議論などの言語活動を行い、教育課程全体で言語能力を育んでいくものである。

幼児教育においては、就学前の5歳児までに育ってほしい姿に豊かな言葉への感性、言葉の力と明記されているが、ここでは、言葉の楽しさ興味関心といった基礎的な部分を丁寧に扱うことにより、その素地が育成されていくと考えられている。その素地は「言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現」に触れ、「使う楽しさを味わ」うことにより、感性が養われ、言葉へのアプローチとなり、その後に豊かな言葉が育っていく、幼児教育における教育の課程となる。

「言葉の力」は、発達段階に応じた基盤づくり、その後の修得段階に、幼小のつながりを見据えながら、適正な判断で育んでいく必要がある。言葉は、表現や思考のもとであり、コミュニケーションの手段であり、さらには行動を左右するものでもある。だからこそ言葉を幼児期にいかに体得していくか、育んでいくかが肝要である。このことから、保育者としての育成者の力量が大きく影響することが想像できる。

5 保育者に求められる「言葉」の力

育成者の力量を考えるうえで、一つには子どもの言葉の発達について理解することは「言葉」の力を育成する者にとって求められる知識である。また、一つには保育者自身の言葉の力、言葉への関心の高さは求められる力である。保育者自身の言葉への関心、知識、力によって、子どもの言葉の育成への影響は少なからず生ずる。

自ら問題提起して、問題解決に向けて主体的創造的に取り組める幼稚園教育の専門家としてその基礎力として、言葉の力は重要と考える。

そこで保育者を養成する立場から考察する。授業実践においては、学生自身の言葉を見つめ直し、学び直す機会としてとらえて、カリキュラムを組み立てることが必要と考える。学生が自ら言葉の力を把握し、課題をとらえて、言語能力の向上を目的として実践を積み重ねていく。

る。また、その必要とされる言語力の基準を明確に示すことが必要であろう。

その実践の一つとして、子どもの言葉を育てる教材である絵本や物語などを活用して、学生自らの力を育成していく方法が考えられる。しかしながら、学生の言葉の力を育てる軸と、子どもの言葉やその育成の軸は、同一ではない。子ども理解という観点から、子どもの言葉をとらえていく学び、理解が求められる。実践を重ねてはいくが、経験値の乏しい学生は学びや実践を通して子どもの言葉の理解を深めていくこととなる。また、「言葉」という領域への理解を深め、知識として体得していく。同時に、学生自身の言葉の力を豊かに、魅力的な発信が可能な力を育成することが求められ、その両方を可能とするカリキュラムの組み立てが必要である。絵本や物語を活用した実践例は先行研究に多くあるが、それは、子どもの言葉を理解するという観点を重視しているものが多く、保育者自身の言葉の豊かさの基準やその能力の段階的な水準を示すものは少ない。この基準については継続的に研究していきたい。

子どもと心を通わせながら、子どもの言葉を育成し、子どもの言葉を豊かにすることは、言葉遊びや絵本や物語を活用して、言葉のリズムや響きに関心を抱かせる活動を通して、親しみ楽しむとある。子どもにとっての関心や楽しみ、親しむことは、子どもの言葉の育成への基盤づくりとなる。子どもにとっての魅力を十分に理解し、導いていくことが求められる。そこには、知識に加えて、言葉の力、関心が欠かせないことは先述のとおりである。保育者側の言葉の力という視点に立ち、段階的な指標づくりが必要と考える。すなわち、言葉を育成するために必要な知識と、保育者自身の言葉を育成することの双方が軸として成立するカリキュラム内容の検討が必要と考える。

6 「言葉」の力の育成にかかる教材

絵本や物語を通して豊かな言語体験を重ねて、「言葉」の力を育成するうえで、絵本や物語の読み聞かせは、大きな力を発揮することは疑うところはない。保育者や保護者との関係の中で、その機会が設定されていく。

言葉の力をつける絵本や物語の読み聞かせを考える時、保護者との関係性の中で、「これからの幼児教育－読み聞かせの実態と言葉の発達」を取りあげたベネッセの継続追跡調査がある。親子間での読書体験の共有については、将来につながる言葉の力を育むとされる（荒牧 2019）。調査報告によると幼児期の読み聞かせ体験が豊かだった子どもほど、小学生になってから一人で絵本を読む頻度が高い傾向にあるとされる。読み聞かせを通じて、本を読む力の素地が育成され、読書習慣の確立につながると指摘する。また、読み聞かせの際の保護者との十分な双方向の体験を通すことが小学生以降の思考の論理性や言葉のスキルに影響することが言及されている。子どもは大人から言葉の力を獲得して、絵本以外にも言葉の世界を広げていく。単なる言葉の習得ではなく、深いコミュニケーションの下で子ども自身の思考を深める場となっていると指摘する（ベネッセ 2019）。

そこで、保育者としての子どもとの関係においては、「子どもの読書体験を豊かにするためにできることはたくさんあり、複数の子どもたちへの読み聞かせて活発なやり取りを楽しむことや、家庭では用意することが難しい様々な絵本を揃えることなど読書への興味を高める機会を作る」ことを言及している。このように保育者として保護者への働きかけをするうえでも確固たる知識が求められる。

基本的に保育者は、多くの絵本や書籍に触れて、それらについて特徴や発達段階への対応を熟知しておくことが望ましい。発達段階に応じた推奨絵本や推奨書籍は広く示されているため、可能な限り多くの絵本や書籍にあたり、知識として理解しておく必要がある。同時に、それらが、言葉の豊かさを育てることにどのようにつながるかについても、正しい理解が求められる。

言葉の修得においては保育者の役割は大きい。保育者や周りの大人との関係性の中で、子どもの言葉は発達していく。「言葉の発達として抜き出して考えるのではなく、心や身体の発達が言葉を生み出す土壌であること」、言葉の発達のみを目を向けがちであることに對して、発達全体の中でとらえる必要性を成田（2018）は指摘している。「幼児の発達に必要な豊かな体験が得られるよう」発達全体の中でとらえることが求められるとある。

言葉は乳幼児期に使い始めるが、その後の言葉の体得については、「学童期、青年期を通してコミュニケーションや思考の具として、また美的表現の手段としての言葉を完成させてゆく。」そして「自分の外なる世界と内なる世界をつくりあげてゆく。（岡本 1982）」とある。言葉は、コミュニケーションの手段、表現の手段であり、行動を制御する手段でもある。言葉は論理の組み立てや思考などの知的活動の基礎であり、基盤をなし、その後の自我の形成や自己表現の手段として、個の確立の肝要な要素となる。

したがって、保育用教材として読み聞かせる絵本や物語の選択については知識に基づいた知見が求められる。教材となる絵本や物語などについては改訂前より絵本や物語などに親しむことは記されていた。幼稚園教育要領の「ねらい」では「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。」「内容」では、「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。」「内容の取扱い」では、「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。」とある。「心を通わせる」すなわち言葉によるコミュニケーション手段としての充実を図り、「想像をする楽しさを味わう」想像力を養うために絵本や物語などを扱っている。

改訂後では「ねらい」に「言葉に対する感覚」を養われるようとの記載が加わり、絵本や物語によってその育成を図ることが明確化された。加えて、絵本や物語に関して記述された項目が追加されている。「内容の取扱い」の「(4)幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。」

とある。絵本や物語に出てくる言葉に重きを置き、言葉の響き、そのリズム、新しい言葉の登場や、言葉による表現に重きをおく体験によって「豊かな」言葉の修得を目指すこととしている。

7 保育者養成の教材としての幼児用書籍

幼児用書籍への理解は、子どもの発達段階に応じた適切な判断と選択が求められる。同時に、保育者が自らの言葉の力を育成する教材ともなる。いわゆる国語文法、修辞法、オノマトペ、言葉のリズムといった一連の国語への知識を再認識させるとともに、国語にかかる確固たる知識をもとにして、絵本や物語の素材そのものの分析を可能とする力を備えることが保育者には望まれる。教材を言葉という視点で分析し、教材の価値を評価したうえで、教材として活用していくことは保育者としての大きな力となると考えている。

幼児教育は、小学校教育、中学校教育、高等学校教育へと続く、教育の基盤を形成するという位置付けにあることが改訂により明らかになった。自ら問題提起し問題解決に際して主体的・創造的に取り組める人材の基礎を作ることが、幼児教育に求められている。幼児教育に携わる保育者には、指導力に加えて、主体的、創造的であり、自ら学ぶ姿勢をもち、クリティカルな視点と柔軟な思考力が必要といえる。質の高い保育者養成のためには、求められる保育者像の理解を踏まえて、どのような保育者を養成すべきか、どのような力を育成するカリキュラムとするのかを、立案しなければならない。

そのためには、今後のカリキュラム作成において、「国語」の観点から、文法的な理解、言葉の特徴の理解、言葉のリズムや修辞への理解、といった共通観点を明示して、絵本や物語を分析させる機会を設定し、自らの国語力への関心を高め、力を育成することが一つである。また、読み聞かせ等の学習をするうえで、国語に関連した知識をもとにしながら、分析、理解、活用をして、多くの絵本や物語を熟知するべく、取り組むことが一つである。

子ども理解を一つとし、国語力育成を一つとして、それらが並行して育成される視点からのカリキュラム作成を考えたい。このことが幼児教育全体への知識理解に影響を与えると考える。入学後早期に動機づけとともに、自身の国語力への評価と認識をもてる仕組みを作りたい。保育者を目指す学生の言葉の力が增すべくカリキュラムを構成し、その検証を踏まえて継続研究を考えている。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（2016）
- 2) 文部科学省 「幼稚園教育要領（平成29年告示）」（2017）

- 3) 厚生労働省 「保育所保育指針（平成29年告示）」（2017）
- 4) 内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」（2017）
- 5) 文部科学省 「小学校学習指導要領解説国語編」
- 6) 国立教育政策研究所 （教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書 5 （2013）
- 7) 三省堂 キーワードを読み解く教育最前線（2015）
- 8) ベネッセ研究所 これからの幼児教育－読み聞かせの実態と言葉の発達（2019）
- 9) OECD 保育の質向上白書（2019），明石書店
- 10) 国立教育政策研究所 幼児教育・保育の国際比較－質の高い幼児教育・保育に向けて－（2020）
- 11) 2020子ども白書，日本子どもを守る会編（2020）かもがわ出版
- 12) 無藤隆監修 新訂事例で学ぶ保育内容（領域）言葉（2018新訂）萌文書林
- 13) 大豆生田啓友・大豆生田千夏著 非認知能力を育てるあそびのレシピ（2019）講談社
- 14) 一般社団法人日本赤ちゃん学協会 赤ちゃん学で理解する乳児の発達と保育第3巻（2019）中央法規
- 15) 大豆生田啓友著 「語り合い」で保育が変わる（2020）学研教育みらい
- 16) 谷田貝公昭・廣澤満之編著 <新版>実践保育内容シリーズ4 言葉（2018）一藝社